様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３７８

研究課題名（和文）パウル・ツェラーンの抒情詩 ― 人間学と自然史のはざまに

研究課題名（英文）The Poetry of Paul Celan - Between Anthropology and Natural History

研究代表者
平野　嘉彦（Hirano, Yoshihiko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：５００７９１０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：この研究課題の目的は、一方でパウル・ツェラーンの詩作品を詳細に読み解きながら、他方でそれが、詩人自身が取り組んでいた「人間学」ならびに「自然史」の範疇と、どのようにかかわるのかを解明することにあった。その過程で、動物、植物を対象化する「自然史」に属する思考と、狂気、死によって限界づけられた現存在の「人間学」的な自己認識とが、Kreatur（「生き物」）のテーゼにおいて相互に収斂するさまをあらためて確認することができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was, on the one hand, to interpret the poetry of Paul Celan in detail, and on the other, to elucidate how it relates to the categories of " Anthropology"and "Natural History", both of which the poet himself coped with. The course of this research especially provides confirmation that the thinking categorized as "Natural History", which objectifies animals and plants, and the "anthropological" self-recognition of the human existence, whose limitations are insanity and death, were converging at the point of the thesis "Kreatur (creature)".

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ツェラーン　人間学　自然史

１．研究開始当初の背景

(1) パウル・ツェラーンの詩作品を思想的、哲学的な文脈のなかで理解する試みは、H.-G. ガーダマー [1973]、O. ペゲラー [1986]、J. デリダ [1986] など、哲学者自身の手によっても、すでになされてきた。Th. W. アドルノもまた、ツェラーンに関する一書を計画していたという。それは、そうした受容の側にのみ、その因をもとめるべき事柄ではなくて、そもそも詩人自身が生前から、たとえば M. ハイデッガー、アドルノなどと交流し、みずから彼らの著作に親しみ、その思想と対峙しようとしていたという事情とも関連している。詩人が 1950 年代に、近代における「哲学的人間学 (Philosophische Anthropologie)」の成立の契機をなしたといわれる M. シェーラーの著書『宇宙における人間の地位』 [1928 年初版、1947 年再版] を集中して読んだことも、そうした経緯のなかで理解される。また彼は、ひきつづき A. ゲーレンや B. グレトゥイゼンの論文や著書にも、眼を通している。そうした「哲学的人間学」は、もともと狭義のディシプリンとしての哲学の埒内にとどまることなく、いわば学際的な志向をそなえていたし、それはまた、ツェラーン自身にも共有されていたように思われる。しかし、詩人なりの広義の「人間学」への傾斜は、ツェラーンの作品解釈においては、哲学、ユダヤ思想、精神医学などとの、それぞれ個別の関連においてとりあげられはするものの、包括的なパースペクティヴをもって論議されたことは、それまで一度としてなかった。

(2) そもそもツェラーンの詩および散文作品に、「人間」の語が、その複数形をふくめて、たびたびあらわれることは、すぐにそれと看取される事実である。その語義は、その都度、かならずしも一様ではないが、歴史的にはホロコーストにきわまるユダヤ人迫害に、さらに詩人みずからの一身に引きつけるなら、かつて両親がウクライナの強制収容所で殺された過去に、さらにはあらぬ剽窃の誣告にさらされている現在に、向きあって、そうした非人間性を批判しようとする、きわめて強い倫理的な含意をそなえている。そして、そこにはまた、詩人 Fr. ヘルダーリーン、W. シェイクスピアの劇中人物である「リア王」などの形姿をかりて、狂気のなかに黙示録的なパースペクティヴを読みとる試みがなされてもいる。すなわち、現在の「人間」の現存在をみずから理解し、記述するにとどまらず、到来すべきあるべき「人間」像を追求するという姿勢が、そこに共通している。したがって、その「人間学」は、いわば未完におわることを宿命としており、もとより哲学体系を構築することのない抒情詩であってみれば、それはつねに断章的表現にとどまらざるをえない。ツェラーンが、当初、志向していた「人間学」は、「人間」主体がみずからの生活世界に関与するという、そこに必然的に要請されるはずの局面において、実践的に現実化されることはなく、詩人自身の性向とも相俟って、「人間学」の周縁としての「自然史」へと、たえず偏倚していく。それも W. レペニースが指摘したように、往時の博物学への展開とは異なって、W. ベンヤミンによってあらためて措定された「自然史」、すなわち「自然＝歴史」として、である（ツェラーンの遺した蔵書は、マールバッハ・ドイツ文学資料館に保管されているが、そのベンヤミン著作集に収録されているバロック論『ドイツ悲劇の根源』のページには、おびただしい数のアンダーライン、欄外の傍線、書き込みなどがみてとれる）。そのように、詩人の「人間学」への試行が挫折せざるをえなかったとしても、「自然史」として露呈される破綻の局面においてこそ、その作品がはらんでいる尖鋭な歴史性が、いわば逆説的な形で現象するのである。

(3) ツェラーンにおけるベンヤミンの、なかんずくそのバロック悲劇論の、影響については、すでに先行研究が存在している（Beese [1976]、Pöggeler [1986]、Ivanović [1995]）。しかし、その「自然史」のテーゼを「人間学」に関連づけて、その詩解釈の準拠枠として設定した研究は、研究を開始した当時においてはまだみられなかった。なるほどハイデッガーとツェラーンの出会いに関しては、とくに詩『トートナウベルク』[1967]（ここにも「人間」の語があらわれる）を引きつつ、さまざまな解釈が展開されてきたし（Gadamer [1977]、Pöggeler [1986, 2000]、Bollak [1998, 2006]、Bogumil [1998]、Lyon [2006]、France-Lanord [2007]、Lemke [2002]）、ツェラーンにおける M.ブーバーの影響についても指摘されてはいる（Lyon [1971]）。しかし、そうした個々の関連を、より広い思想史の文脈のなかに位置づけようとした論考は、まだ存在していなかった。

２．研究の目的

この研究課題のとりあえずの目標は、一方でツェラーンの詩作品を詳細に読み解きながら、他方でそれが、詩人自身が取り組んでいた「人間学」ならびに「自然史」の範疇と、どのようにかかわるのかを解明することにあった。しかるのち、その成果をより広い学際的な諸関連のなかへと解き放つことを意図したが、それは、既往の「人間学」の周縁としての「自然史」から、逆に新たに意味づけられるべき「人間学」へとたちかえる、その方途をさししめさんがためであった。それは、もはや人間中心主義的な「人間学」ではなく、狂気において理性の支配もゆらぎ、ハイデッガーによって提示された個的存在としての死の特権性をも剥奪されて、ホロコーストに具現された無名の大量死の事実性へと還元されていく「人間」を考える、そうしたひとつの「学」にほかならないが、それにいたるには日暮れて道遠しの思いを禁じえない。

３．研究の方法

(1) 東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ文学研究室を主たる研究の場としながらも、並行して調査研究を国際的に展開した。海外研究協力者と連絡をとり、意見交換をおこなうとともに、ドイツ、オーストリアの大学ないし公立図書館において文献資料の探索に努めた。その概要は以下のとおりである。

(2) 平成 26 年度は、8 月、9 月の 2 ヵ月間、マールバッハ・ドイツ文学資料館において主任司書のアルノー・バルネルト博士と意見交換をおこなうかたわら、ツェラーンの詩作品と「自然史」の主題にかかわる文献、とりわけ詩人の遺したすくなからぬ蔵書を参看した。

(3) 平成 27 年度は、7 月、8 月の 2 ヵ月間、ケルン大学に研究滞在し、大学図書館での文献調査にくわえて、ヘルダーリーン、ハイデッガー、ツェラーンにおける「中間休止」に関する浩瀚な著書がある、ドイツ文学講座のアーニャ・レムケ教授と意見交換をすることができた。さらに 12 月、1 月に自己負担によってウィーン大学図書館、オーストリア国立図書館において文献調査をおこなった際には、ウィーン大学客員教授のクリスティーネ・イヴァノヴィッチ博士との研究協力をすすめるなかで、「自然史」をめぐる一層の知見を得た。

(4) 平成 28 年度は、9 月、10 月にミュンヘン大学、さらに自己負担によって 12 月、平成 29 年 1 月にチュービンゲン大学において、研究滞在をおこなった。ミュンヘンでは、その期間、受入教官のオリファー・ヤールアウス教授がたまたま不在であって、直接の意見交換はならなかったが、電子メールによって意思疎通をはかることができた。ミュンヘン大学図書館、バイエルン国立図書館での文献調査も支障なくおこなわれた。またチュービンゲンにあっては、受入教官のドロテー・キミヒ教授のみならず、ツェラーンの詩作品の実証的研究では斯界の第一人者であるバルバラ・ヴィーデマン博士と再会し、意見交換ができたことは、大きな収穫であった。またミュンヘン滞在中の 10 月下旬にグラーツ大学で開催された、近代におけるドイツ語のさまざまな発展形態に関するシンポジウムに参加した。口頭発表をおこなう機会にはめぐまれなかったが、主宰者のディートマール・ゴルトシュニッグ名誉教授の許可をえて、シンポジウムの成果をまとめる論集に、ツェラーンに関する論考を寄稿することができた。ちなみに、この論集は平成 29 年中には刊行される予定である。

４．研究成果

研究成果の概要は以下のとおりである。

(1) まず動物、植物の形象をもちいた詩作品をとりあげて、その解釈をおこなった。その際に留意したことは、① おなじく植物学に通じていた 19 世紀アメリカの詩人 E. ディキンソンの作品のツェラーンによるドイツ語訳をも対象とする、② 野生の動植物にとどまらず、その自然支配、農耕、馴致、栽培植物化などの局面を明らかにする、の二点であった。すでにその時点において、シェーラー、ハイデッガー、ブーバー、L. ビンスヴァンガー等の、いわゆる「哲学的人間学」の系列に属する思想家たち（意図してそこから批判的な距離を保っていたハイデッガーも、広義においてこの系譜に数えいれていいだろう）に、「精神」を中枢とする人間中心主義のパラダイムが存在していることを認識していた。それは、おなじ生き物である動物とのたえざる差異化をともなって現出するが、これは、やがてツェラーンの死後、ナチズムの生物学主義との関連をも示唆する、デリダのハイデッガー批判 [1987、2006] を呼びおこすことになる。ツェラーンの詩作品は、前述の「自然史」的な局面において、このデリダの問題提起を先取りしていることをあらためて確認することができた。詩人が J.-H. ファーブル、J. v. ユクスキュル、A. ポルトマンなどの生物学者の著書を所蔵し、また実際に読んでもいたことは、その意味でもきわめて興味深く、ポルトマンとファーブルからの引用およびパラフレーズがその詩行のなかに看取されることも、すでに先行研究（Schulze [1970, 1976]、Klose [1987]）によって明らかにされているところであったが、この間テクスト的関連をその詩行においてより詳細にたどることができたのも、収穫のひとつである。

(2) ツェラーンの「人間学」への志向は、当初のシェーラーの「哲学的人間学」から、やがてブーバーのユダヤ宗教思想へと移行していくが、それもブーバー自身との出会いが幻滅におわったあと、1960 年代には、詩人自身が幾度か精神病院に収容されるうちに、ビンスヴァンガーの「現存在分析」に傾斜するようになる。それは、詩人の蔵書に含まれるビンスヴァンガーの『精神分裂病』[1957] にみられる詳細な書き込みが立証しているところであった。その詩作品のなかに精神病の妄想と解釈される形象もないわけではないが、本研究においては、そうした「症状」を記述する病誌学を意図することなく、詩人自身がみずからの「狂気」を了解し、その存在理由を明らかにしようとする、またひとつの「現存在分析」の試みを跡づけることをめざした。そのなかにあっても、ツェラーンは、かわることなくハイデッガーの存在論に向きあっていた。そのかつてのナチズムへの関与について、詩人の心中に生じた葛藤は、ついに解かれることがなかったにせよ、1950 年代に『存在と時間』[1927] に没頭するなかで彼が追求した「死」のテーマは、依然として大きな問題でありつづけた。1960 年代にツェラーンが志向していたのは、畢竟、狂気と死の「人間学」であったと極言してもいいだろう。

(3) ツェラーンのゲオルク・ビューヒナー賞受賞講演『子午線』[1960] のなかでは、「生き物（Kreatur）」としての「人間」にそなわる「現存在」の「傾斜角」が強調されているが、このようにして、動物、植物を対象化する「自然史」に属する思考と、狂気、死によって限界づけられた現存在の「人間学」的な自己認識とが、「生き物」のテーゼにおいて相互に収斂するさまを確認することができた。最後にそれまで得られた知見を総合し、集約すべく努めたが、それはかならずしもいたずらな体系化を意図するものではない。M. フーコーがみずからの学位論文 [死後、2008 年刊] のなかで、カントの「人間学」をふさわしく定位したように、人間が「人間」について語るその試みは、シェーラーが「精神」の名のもとに「人間」の特権的な境位から遂行しようとしたのとはうらはらに、体系たることをみずから断念して、ややもすれば「自然史」に偏倚せざるをえないからである。ともあれ、その成果はようやく著書の形をとって、ドイツで刊行される運びとなった。ヴュルツブルクの Königshausen & Neumann 社から、すでに基本的に出版の承諾を得ている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Yoshihiko Hirano、Die Wiederholung des „Gleichen“? Eine Obsession bei Kierkegaard, Nietzsche und Freud. In: Akio Ogawa (Hg.): Wie *gleich* ist, was man ver*gleich*t? Ein Interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West、Stauffenburg、査読無、2016、35-44

② 平野嘉彦、二様の詩が寓意するもの ― ツェラーンのディキンソン独訳をめぐって、『流域』37巻1号所収、青山社、査読無、2016、7-14

③ Yoshihiko Hirano、Wien 1948. *Der Sand aus den Urnen* von Paul Celan und *Die größere Hoffnung* von Ilse Aichinger. In: Martin Kubaczek / Sugi Shindo (Hg.): Stimmen im Sprachraum. Sterbensarten in der österreichischen Literatur、Stauffenburg、査読無、2015、59-73

④ Yoshihiko Hirano、Lektüre einer Naturgeschichte. Zu Celans Gedicht *Todtnauberg.* In: Gabriel H. Decuble / Orlando Grossegesse / Maria Irod / Stefan Sienerth (Hg): „Kultivierte Menschen haben Beruhigendes...“. Festschrift für George Guțu. Band I. Editura Universitatii din Bucuresti / Editura Paideia Bucuresti / Editura Pop Ludwigsburg、査読無、2014、84-100

⑤ Yoshihiko Hirano、Die Kafka-Rezeption in Japan um 1960. *Partei* von Kurahashi Yumiko und *Die Frau in den Dünen* von Abe Kobo. In: Steffen Hoehne / Ludger Udolph (Hg.): Franz Kafka. Wirkungen und Wirkungsverhinderungen. Intellektuelles Prag im 19. und 20. Jahrhundert. Bd. 6、Boehlau、査読無、2014、397-413

〔学会発表〕（計 1 件）

① 平野嘉彦、「狂気」の Anthropologie ― ツェラーンの詩 Give the Word をめぐって、日本オーストリア文学会秋季例会、京都府立大学（京都府京都市）、2014 年 10 月 10 日

〔図書〕（計 2 件）

① 平野嘉彦（訳）、平凡社、ハンス・ディーター・ツィンマーマン『マルティンとフリッツ・ハイデッガー ― 哲学とカーニヴァル』、2015、287

② 平野嘉彦、法政大学出版局、『土地の名前、どこにもない場所としての ― ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、ウクライナ』2015、264

６．研究組織
(1)研究代表者
平野　嘉彦（HIRANO, Yoshihiko）
東京大学･大学院人文社会系研究科・名誉教授
研究者番号：50079109

(2)研究協力者
BARNERT, Arno
マールバッハ・ドイツ文学資料館主任司書（現ヘルツォーギン・アンナ・アマーリエ図書館司書）
GOLTSCHNIGG, Dietmar
グラーツ大学名誉教授
IVANOVIĆ, Christine
ウィーン大学客員教授
JAHRAUS, Oliver
ミュンヘン大学教授
KIMMICH, Dorothee
チュービンゲン大学教授
LEMKE, Anja
ケルン大学教授
NEUMANN, Gerhard
ミュンヘン大学名誉教授
WIEDEMANN, Barbara
チュービンゲン大学講師